

黒い塔

小川未明

青空文庫

昔むかしのことでありました。ある小さな国くにの女皇じよおうに二人のお子こさまがありました。姉あねも妹もうともともに美しくうつくいうえに、りこうでありました。女皇じよおうは、もう年としをとっていられたか
ら、お位くらゐを姉あねのほうのお子こさまに譲ゆずろうと思おもつていられました。

そのうち、姉あねのほうめが、目をめをわずらわれて、すがめになられました。いままで、花はなのよ
ううつくに美うつくしかった顔かおが急きゆうに醜みにくくなつてしまいました。すると、女皇じよおうは、いままでのよ
うあねに美うつくしくはかわいがられずに、妹もうとのほうあねをかわいがられるようになりました。

姉あねは、それをたいへん悲かなしみました。なにも自分じぶんの知しつたあねとがではない。病びよう氣きでこ
んなに醜みにくくなつたものを、なんでお母かあさまはきらわれるのだらうかとなげきました。

しかし、妹もうとの情なさけは、前まえとすこしも変かわりません。姉あねさんねえをうやまい、なつかしみまし
た。しかるに、不幸ふこうの姉あねは、ある日ひこと、また、高たかい階かい段だんから落おちて、産うまれもつかぬ
ちんばになつてしまつた。

すがめでさえ醜みにくいといつてきらわれた、母ははの女皇じよおうは、そのうえちんばになつていつそ

う醜みにくくなつた姉あねのほうを、ますますうとんぜられたのであります。そればかりでなく、妹いもうとまでが、姉あねをきらうようになつたのであります。

これと反対はんたいに、妹いもうとひめの姫ひめはますます美しくなりました。花はなよりも、星ほしよりも、この世界せかいに見みられる、いかなる美うつくしいものよりも、もつと美うつくしく見みられたのであります。貴たつとい宝ほうぎ玉よくも、その美うつくしさにくらべることができなかつたのであります。

女皇じよおうの心こころは、いつしか、王位おういを妹いもうとゆずに譲ゆずらうときめていました。けれども、この街まちの民たみはどう思おもうかと気きづかわれました。あたりまえならば姉あねが王位おういをつぐのが順じゆん序じよでありますから、街まちの人民じんみんは、なんといつて、反はん対たいすまいものでもなかつたのであります。

そこで、女皇じよおうは、街まちの人々ひとびとにこれを聞きくことにいたしました。すると、街まちの人々ひとびとは、

「それは、われわれどもが王おうさまをいただくなら、美うつくしい妹いもうとひめ姫ひめのような女皇じよおうが望ぞましいものでございます。醜みにくいお方は、なんとなく気き持ちが悪わるうございますから、どうか妹いもうとひめの姫ひめをいただきたいものでございます。」と、訴うったえました。

これをお聞ききになると、女皇じよおうはだれの心こころも同じおなじものだと思おもわれて、いまはなんの躊ちゆう躇ちよもなく、位くらを妹いもうとゆずに譲ゆずることになさいました。

ひとり、姉のほうは、さびしく、悲しくへやのうちに日を送られました。だれに向かつて、訴えてみようもありません。さらばといつて、このままこの城に長くいることもできないのでありましょう。いずれは、どこか遠いところに移されてしまうであろうと思うと、気がおちつくこともできません。いっそ、自分からこの城を去ってしまいたいなどと思つて、毎日、窓ぎわに立つて遠く、あてなくながめていられました。

この街には、昔から、高い、不思議な塔が立つていました。だれがこの塔を建てたものかわかりません。また、なんのために造つたものかわかりません。人々は気味悪がつて、かつてひとりとして、この塔の上に登つたものはなかつたのであります。

このきみ悪い、白い塔が、ちようどこの姉の姫の立つていられる窓から、かなたに見えたのであります。

夕暮れ方の光を受けて、その塔は、謎のように、白壁や、煙突や、その他工場場の建物や、雑然とした屋根などが見える、街の中にそびえて、そこらを見下ろしていました。

いましも、ふと姉の目が、この不思議な高い塔の頂に止まりますと、思いなしか、その塔が手招ぎするような気がしたのであります。

「これは、わたしの目のせいであろう。」と思つて、姉の姫は、いつてみるなどという妄想は断たれました。そのうちに、日は沈んで、静かな夜は街の上にかかる、したがつて塔の影も見えなくなつてしまいました。

二

毎日こうして、姉はへやのうちに閉じこもつてさびしく日を送りました。母や、妹は、音楽会や、船遊びなどに出かけられるのを、自分だけは、ただこの窓から、遠くの花しかながめることができなかつたのです。どんなに海のながめは美しかろう。どんなに花の咲いている野原のながめは美しかろうと思つても、不具の身は出かけることもできませんでした。やがて、その日も暮れかかりました。姉は、独り窓から街の方をながめていました。そのうち塔の頂に目が止まると、またしても、その塔が自分を手招きするような気がしたのであります。

「あの塔の上に登つたら、きつと海が見えるにちがいない。」と、そのとき姉は思いました。そう思うと、しきりにいつてみたくなりました。

明くる日、姉は、だれにも知れないように、苦心をして城からのがれ出ました。そして、町の人々に女皇の姫であるということを気づかれぬようにして、塔の立っているところまでやってきました。

塔の周囲は荒れ果てていました。草が茫茫々としてしげっていました。幾十年このかた、だれも、この塔に上つたものがありません。町の人々は、この塔を幽霊塔と名づけていました。

けれども姉は、そんなことを気にかけませんでした。また、たとえ命を捨てるようなことがあつても、それを惜しまないと思ひましたから、ただ一人で、その暗い、わずかにこわれかかった窓からさしこむ、光線をたよりとして、一段一段上へと登つてゆきました。姫は、日ごろ自分の心を慰める、小さな豎琴を携えてゆくことを忘れませんでした。これだけは、つねに姫の仲のよい友だちであつて、月夜の晩に、花の下に姫を慰めたのであります。

暗い塔の中は、冷たい、しめつた空気がみなぎっていました。また階段には、人の骨だか、獣物の骨だかわからぬようなものが、散らばっていたりしました。姫は、それらの上を踏んだりまたいだりして上つてゆきました。

やつと塔の頂上に達しますと、そこは体をいれるだけの狭いへやになっていました。もとより、ほこりがたまっていました。姉は、そこにすわりました。そして、その塔のいちばん高い窓から四方をながめることができました。

そこからは、鏡のように光った海が見えました。街は目の下になって、大きな建物も小さい見え、往来などは白い筋のようにかすんで、人影などは、ありのようになって見えたのです。

姉の姫は、この景色をあかすながめていられました。そして、持ってきた豎琴を弾いて独り心を慰めていました。

空を飛んでいる小鳥は、この不思議な音色を慕って、どこからともなく、たくさんこの塔の周囲に集まってきました。そして、その頂に止まったり、また窓頭に降りてきて、音色に聞きとれていました。

姫は、これらの小鳥を心から愛しました。そして太陽が、だんだん西に移ってゆくのも忘れていました。

このとき、はるか、沖の方から黒い雲が起こってまいりました。たちまち空は曇って、墨を流したようになり、風がヒューヒューといつて空を吹いてきました。けれど、昔から

立っている塔は、その風のためにびくともいたしませんでした。姉の姫は、この急に変わった、ものすごい空の模様をながめて、どうなることだろうと案じていました。そして、たよりなく、塔の上で、独り琴を鳴らしていました。

おおいえ 大声に狂って駆ける風までが、このいい琴の音に聞きとれたとみえて、しばらくその叫び声を鎮めたのであります。

三

ひめ 姫は、だんだん心細くなりました。いまは塔を下りて帰ることもできないほどに、風雨がつのつたのであります。しかたなく、姫はこの心の悲しみを琴の糸に托して、いつまでも琴を弾いていました。

このとき、ふと目を上げて沖の方をながめますと、真つ黒な壁を築いたように海が浮き上がったのです。そして、ひどいとどろきをあげて陸に向かって押し寄せてまいりました。

「つなみだー！」

と、姫は驚きの叫びをあげました。そして、じつと見つめていますと、真つ黒な壁はだん

だん近くちかなつて、街まちをはしの方ほうからのんで、もつと押し寄おせてきました。

姫ひめはお母かあさまや妹いもうとのいるお城しろを見みながら案あんじて、どうかしてお母かあさまや妹いもうとの身みの上に危き害がいのないようにと祈いのっている間に、はや、真まつ黒くろな壁かべはついにお城しろものんで、もつともつと押し寄おせてきて、街まち全体ぜんたいをのみつくして、かなたの野原のはらの方ほうまで、一面めんに海うみとなつてしまつたのです。

しかし、この不思議ふしぎな高たかい塔とうだけは、波なみにさらわれずに昔むかしのままに立たつていました。姫ひめは一人で、その塔とうの頂いただきに泣ないていました。

夜よるになつたらどうなるであらう。姫ひめはとても命いのちが助たすからないと思おもつて、心こころ細ほそさに震ふるえていましたとき、灰はい色いろの海うみの上うえに一いそうの赤あかい船ふねが見みえました。

その船ふねは絵えにも見みたことのない、また話はなしにも聞きいたことのないような、きれいな不思議ふしぎな船ふねでありました。

赤あかい船ふねは、塔とうをめぐめてにだんだん近ちかづいてまいりました。姫ひめは塔とうの窓まどからその赤あかい船ふねをながめて声こえをあげて救すくいを求もとめました。

すると赤あかい船ふねは、だんだん近ちかづいてきて、船ふねの中なかに乗のつていた見慣みなれないふうをした人ひとは、塔とうの窓まどから姫ひめを救すくい出だして、赤あかい船ふねに入いれて、どこへともなく連つれていつてしまいま

した。

そしてその赤い船は、まったく姿を地平線のかなたに消してしまいました。
 海の水はますます増してきて、その夜のうちに、塔のみつくしてしまいました。明るく
 なる日になると、一面に海となっていました。もう、昔の街は跡形もなかったのです。

風だけは、悲しい叫びをたてて海の上を吹いていました。小鳥は、いまもなお姫のゆく
 えをたずねて、夏になると北へ、冬になると南へ、旅をして、あわれな姫を探しています。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二 講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

※表題は底本では、「黒《くろ》い塔《とう》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年9月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

黒い塔

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>